

戦時 - 戦後体制を貫くもの

——ハイデガー（「ヒューマニズム書簡」と「ブレーメン講演」）の場合——

小泉 義之（立命館大学）

一 戦時についての弁明

『「ヒューマニズム」について』¹は1947年にフランケ版として刊行されているが、その元になったジャン・ボーフレ宛書簡は、1946年秋に書かれている。その時期には、フランス軍の占領下で、フライブルク大学政治浄化委員会によるハイデガー審理が始まっており、書簡執筆の重要な背景をなしている。例えば、審理進行中の1945年10月にバーデン・バーデンのフランス軍政府役人がハイデガーに同地での講演を依頼したようである。これは実現しなかったものの、その際に、フランスの『ルヴュ・フォンテーヌ』の編集局が、当時バーデン・バーデンに勤務していたエドガー・モランを介して書簡を送り、ハイデガーの著作などのフランス語訳出版を依頼してもいた。これはフランス軍の審理に対する態度にも関係していたわけだが、既に「フランス」はハイデガーにとって好ましい名宛人として現われていたのである。「ヒューマニズム書簡」読解においては、このような事情を無視するわけにはいかない。

端的に言って、「ヒューマニズム書簡」は、戦時期のおのれの思考と行動をハイデガーが弁明するテキストである。ドイツ国内に向けては発し難い弁明、大学政治浄化委員会では通じようのない——その委員長は戦時体制を戦後体制へと引き継ぐことになるオールド・リベラリズムの創始者たるヴァルター・オイケンであった²——弁明を、ドイツを占領する上位権力に向けて、ドイツの外の知識人に向けて発しているテキストである。実際、ここでは、ハイデガーが何度か言及していたヘラクレイトスのエピソードが新たな仕方で語り直されている。ボーフレが「存在論と倫理学の関係」を問うたのに対し、ハイデガーは、ヘラクレイトスの格言「エートス、アントローポー、ダイモーン」（エートスは人間にとってのダイモーンである）を持ち出して、こう書いている。

エートスとは、滞在地、住む場所である。人間が住む開けた地域である。人間の滞在地という開けたところである。そして、ダイモーンとは、人間がその本質において帰属しているものである。悪魔的なものというよりは、神的なものである。（K 46）

ハイデガーが滞在する場所は、ハイデガーにとって神的なものであり、まさにそのことが存在（論）と倫理（学）の一致を具現しているというのである。では、その滞在地とはどこを指しているのか。悪魔的なものはどうなったのか。アリストテレス『動物部分論』A巻第五章 645a17が伝えるヘラクレイトスのエピソードの語り直しを読んでみよう。

「異邦人たち」はヘラクレイトスに会いたいと思っていた。その異邦人たちがやって来ると、ヘラクレイトスは焼がまで暖をとっていた。その様子を見て、異邦人たちは驚いて立ち止まった。というのも、ヘラクレイトスがこう語って中へ入るように命じたからである。「ここにも神々が現前しているのだから」。(K 47)

ここで異邦人たちは何に驚いたとハイデガーは語っているだろうか。ヘラクレイトスが発した言葉——それは「エートス、アントローポー、ダイモーン」に呼応している——に驚いたわけだが、ハイデガーはこう続けている。ヘラクレイトスは、焼がまでパンを焼くのではなく、自分が暖まるためにだけそこに「滞在している」。ヘラクレイトスは、「まったくの貧しさ」を曝け出している。異邦人たちは、その「寒さに凍えている思索者の眺め」、その「幻滅的な眺め」にも驚いたのである、と。つまり、ドイツ国内において大学政治責任の審理の対象とされ大学からも追い立てられ寒村で貧しさを強いられてもいるハイデガーのその住まいにこそ、神々が現前して存在と倫理を一致させているというそのことに異邦人たちは驚くべきであり、その驚きを異邦に向けて伝えるべきであるというのである。

ところで、ここでのハイデガーは、焼がまの火についても、神的なものについても、それを「聖なるもの」(K 30) とするだけで、特段のことは書いていない。戦時期の『パルメニデス』では、「安全な環境」(Umkreis des Geheuren) にこそ存在という恐ろしいものが現われることの例示として、焼がまに、恐ろしいもの (das Ungeheure) があるとしていたのだが³、悪魔的なものにはまったく言及していない。あたかも戦時期から悪魔的なものとは一線を画してきたと言いたいかのようなのである。では、ハイデガーは、戦時期のドイツはひたすら悪魔的で、おのれの居場所はひたすら神的で聖なるものであったとでも弁明したいのであろうか。ひとまずはそう読める。ハイデガーは、ヘラクレイトス的の思索者であることにおいて、戦時体制に対して抵抗をなしていたのだと言いたいのである。その抵抗は異邦人には驚くほどに貧寒としたものであるにしても、それこそがレジスタンスでもあったのだと、まさに異邦人に向けて書いているのである。私は、ハイデガーのこの弁明は、ある重要な意味において、誤魔化しでもなければ間違いでもないと考えている。問われるべきは、どうしてハイデガーは戦後期も一貫してかくもおのれのイノセンスを確信できたのかということである。この観点から、テキスト冒頭の行為の規定を読み直してみよう。

世の中で行為はこう捉えられている。行為は、結果を引き起こすことであり、その結果の現実性はその効用で評価される。しかし、そうではない。行為の本質は、達成すること、何かをその本質の充実へ展開すること、その充実へと付き添っていくこと、*producere* (前に導くこと) である。(K 5)

この規定は結果責任を問われるような行為概念を退けるために語られていると読めなくはないが、例えば、戦時期のハイデガーが一貫して目指していた民族からの国家形成といった行為を念頭に置くなら、別の読み方が必要になってくる。実際、ハイデガーが退け

ている行為観は、行為をその結果＝効用で評価する見方だけではなく、*producere* を生産として捉える見方である。そして、ハイデガーは、*producere* については、その原義に立ち返って、「産み出す」系統の発生的な意義で捉えて、行為とは、本質的には、国家を民族からその本質の充実に向けて展開＝発達させることであり、国家の本質の充実へ付き添っていくことであり、おのれはそんな行為にだけ関与してきたと言いたいのである。これに対し、ハイデガーがおのれをそこから区分しそれに抵抗したものを〈生産力主義〉と名指すことができる。戦時期日本からその類例をとるなら、大河内一男などに代表される、若い頃にマルクス主義の影響を受けながら、ドイツ社会政策・社会事業研究へ向かい、その後、戦時社会政策・社会事業を主導し、戦後の社会保障・社会福祉をも主導していった生産力主義、あるいはまた、中山伊知郎などに代表される、若い頃からマルクス主義や古典的政治経済学に対してエコノメトリクスの導入に努め、戦時体制の合理的で計画的な統制経済を主導し、戦後の経済復興と経済成長の理論的主柱となっていたまさにオールド・リベラリズム的な生産力主義が主要敵として遇されているのである⁴。

ハイデガーは、戦時から戦後にかけての主流派に対して、その *producere* を対置しているわけだが、その整合的な解釈は、ハイデガーの発生物的なものに対する態度の揺れもあって簡単ではない。ここでは、力の所在に関してだけ述べておく。一般に、存在者の発生、存在者の本質の充実については、その存在者に自ら発生していく力・能力・力能が内在することを強調したくなる場所であるが、ここでのハイデガーは、その類の力を存在者ではなく存在 (*Sein*) に帰している。そして、存在は、行為と思考を発生させる「静かな力」(*stille Kraft*)、「可能的なものの静かな力」(*stille Kraft des Möglichen*) であるとしてもいる。とするなら、その存在の力は、存在者の本質の充実とそれに付き添う *producere* も発生させることになる。ところが、ドイツ民族からのドイツ国家の本質の充実は達成されなかった。ドイツは戦争に敗れたのである。ハイデガーの行為と思考も付き添い損なったのである。とするなら、存在の力はどうなったのか。存在の力はどこへ行ったのか。この観点から、自然科学論を読んでみる。

生理学や生理学的生化学が人間を有機体として自然科学的に探求しようということは、こうした「有機的なもの」のうちに、すなわち科学的に説明された身体のうちに、人間の本質が存することの証明ではない。このことは、自然の本質は原子エネルギーに含まれているとする意見と同じくらい成り立たない。というのも、自然は、人間による技術的奪取 (占領) に対して向ける面においては、その本質を隠すということもありうるからである。(K 16)

ハイデガーによるなら、自然科学は自然や人間の諸力を奪取するにしても「その本質を隠す」こともありうる。自然科学は、戦時体制の生産力主義の下で、自然や人間の諸力を解放するにしても、自然や人間の本質の充実失敗することもありうる。しかし、失敗しながらも隠すのである。隠すという仕方で仄めかすのである。とすると、戦時体制の生産力主義に対する区分線はどういうことになるのか。労働論を読んでみる。

唯物論の本質は、すべては素材にすぎないとする主張に存するのではなく、それによれば、すべての存在者が労働の材料として現われるという形而上学的規定に存するのである。労働の近代的 - 形而上学的本質は、ヘーゲル『精神現象学』で次のように先駆的に思考されている。すなわち、無制約的な製作が自己を設備化（施設化）する過程。すなわち主体性として経験する人間による現実的なものの対象化として、先駆的に思考されている。唯物論の本質は技術の本質に隠れている。それについて多くのことが書かれているが、わずかしか思考されていない。技術は、その本質において、忘却のうちにとどまる存在の真理の、存在 - 歴史的な運命である。(K 32)

ハイデガーは、近代的 - 形而上学的労働に対して抵抗していたと言いたいのであるが、同時に、その労働を技術の本質において思考しなければならないと、しかもそこに存在の真理の存在 - 歴史的な運命を見て取らねばならないと言うのである。これは驚くべき弁明であると言わなければならない⁵。ハイデガーは、近代的 - 形而上学的労働に全面的に依存して「技術人間」たるテクノクラートが「計画」し「集積」し「秩序」化する戦時体制そのものに存在の「静かな力」を見て取ったのである。つまり悪魔的な戦時体制そのものに存在 - 歴史的な運命を見て取ったのである。これはいかなる類の弁明なのであろうか。それが弁明として成立する条件はおそらく一つである。ドイツを敗戦に追いやった諸国にしても同じ戦時体制にあり、しかも戦勝国・敗戦国を問わず、戦後体制はその戦時体制を引き継いでいく場合である。つまり、戦時体制と戦後体制を地続きと見るその姿勢が、ハイデガーの確信を支えているのである⁶。そのとき、ハイデガーが戦時期に期待した本来の行為たる国家形成が頓挫したとしても、そしてはや国家形成への賭けは打てなくなったにしても、ハイデガーの居場所だけは聖なるものであり続けるであろう。そして、ハイデガーは、テキストの決定的な箇所、癌発生という生物的な隠喩を持ち出している。

健全なるもの（聖なるもの）と同時に、存在の空き地には、悪しきものが現われる。この悪しきものの本質は、人間の行為のたんなる悪さに存しているのではなく、憤怒の悪性（悪性の憤怒）(Bösartigen des Grimmes)に存している。健全なるものと悪性のものの二つは、それでも、存在そのものが争いである限りにおいてのみ、二つとも *wesen* することができる。その争いに、否定することの本質的出所が隠されている。否定するものは、否定のようなものとして明らかにされる。(K 51)

健全なるものと悪性のものは同時に現われる。戦時体制が悪性であったとしても、戦争が悪性の憤怒であったとしても、その否定性も、それに対決する否定性も、存在の争いから発している。だから、悪性のものを簡単に否定して済ませるわけにはいかない。しかし、忘れるべきではないのは、それら両者が存在の空き地に現われたのは、まさにドイツだけにおいてであった。ドイツだけが存在の争いの場であり、ドイツだけが健全なるものと悪性なものの同時発生と対立を引き受けたのだ。戦時体制は、たんなる悪ではない。人間の悪しき行為が製作したものなどではない。そうではなくて、健全なるものが現われるところにこそ現われるべくして現われた悪性の病なのだ。そして、この戦時体制は世界の戦時

体制として広まるであろう。

存在は、最初は、健全なるものに対して、恩寵のうちの上昇を受け（許し）、そして、憤怒に対して、災い（非健全なるもの）への殺到を受ける。（K 52）

ドイツの悪性の病はおのずと崩れた。人間の行為や技術によって打倒されたのでも異邦人によって解放されたのでもない。ドイツにだけ光を注いだ存在の「静かな力」によって崩されて癒されたのだ。そこに滞在し続けた自分は、存在 - 歴史的な運命を感知しながらそのことを待っていただけである。そこにフランス人が訪ねてきた。だから、フランス人を介して世界に伝えてやろうではないか。以上のように、ハイデガーは、戦時体制と戦後体制に対していわば両価的な態度をとっている。その悪魔的なものとおのれは対峙しているのであるが、それでも悪魔的なものは神的なものを隠すという仕方で仄めかすのであって、それこそが存在 - 歴史的な運命であるからには、それに堪えて凌いでいかなければならないという態度である。その点を、戦後の「ブレーメン講演」で確かめておく。

二 戦後体制に対する両価的態度

「ブレーメン講演」は 1949 年に行なわれている。絶滅収容所に言及する二つの有名な（悪名高い）箇所に触れておく。

Bestellen によって、土地は炭鉱地区となり、地面（地盤）は金属鉱床となる。この Bestellen は、かつて農民がその耕地（畑）を耕したその Bestellen とは、およそ異なる種類である。農民の行ないは、耕地の地盤に挑みはしない。むしろ、農民の行ないは、種子を成長力に委ねる。農民の行ないは、成育中の種子を見守る（番をする）。ところが、いつしか、野原（原野）の耕作も、同じ Be-stellen へ移行してしまった。この Bestellen は、空気を窒素に向けて、地盤を石炭と金属に向けて立て、金属をウランに向け、ウランを原子エネルギーに向け、原子エネルギーを bestellen 可能な破壊へ向けて立てる。いまや耕地建設（農耕）は、機動化された食料産業であり、本質において、ガス室と絶滅収容所での死骸の製造と同じものであり、土地（国土）の封鎖と兵糧攻めと同じものであり、水素爆弾の製造と同じものである。（S. 27）

論点を二つほどあげておきたい。第一に、農民の位置づけである。これは、労働・労働者に区分線を入れるかどうか、入れられるかどうか、入れるべきかどうかという論点にかかわるが、ここで農民の行ないは、対自然労働の範型として描かれている。一応、「かつて」の姿として描かれ、「いつのまにか」変わったと叙述は進んでいるが、変わったのは、原野の開拓、耕作への機械導入、市場向けの食料生産といったことであり、いわば資本へ包摂されるようになったということであって、農民の行ないそのものには変わりはないのであると言えそうではある。この論点には本稿の最後で立ち返りたい。第二に、有名で悪名高い

後半部分についてであるが、そのような評価以前に気づかれるべきは、何が同じ (das Selbe) と言っているのかまったく定かではないということである。まさか食料生産を植物死骸の製造と捉えて類比を走らせているわけでもあるまい。では、ガス室とそれ以下を同じと言えるのはどうしてか。製造 (Fabrikation) についてなら、死骸の製造、水素爆弾の製造と言われている。これに比べるなら、ガス室と絶滅収容所の製造とでも言われるべきであろう。しかし、土地の封鎖における製造とは何であろうか。あれこれ詮索はできようが、要するに、何を同じとしているのかまったく曖昧なのである。もちろん Bestellen が同じであると言いたいのであろうが、全体として同一化も類比もうまく行っていない。問われて然るべきは、この混乱をどう評定するかである。これはよくある思考パターンであるが、Bestellen といった作用面での同一化や類比を進めるには、作用から対象を外さざるをえない。比較不能でありうる作用を比較するには、比較不能性を対象の側に送付して作用だけを取り出せるというつもりにならなければ同一化や類比は走らない。とすると、こう読まれる。目的語を括弧入れしながら、(耕地を) 耕すこと、(死骸を) 製造すること、(土地を) 封鎖すること、(兵糧) 攻めること、(水素爆弾を) 製造することは、同じであるということになる。ここで Bestellen は、一連の異質で比較不能であるかもしれぬ具体的で個別的な行為・労働を、同質で計量可能で比較可能な抽象的労働へと包摂する作用であるということになりそうである。ハイデガーに「ガス室と絶滅収容所での死骸の製造」という表現をとらせたもの、しかもそれを他の「製造」との類比に置かせたものは Bestellen なのであって、批判されるべきものがあるとするなら、それはハイデガーの筆法であるというよりは、その筆法を不可避のものとしている Bestellen なのであるということになりそうである。そして、言うまでもないが、その Bestellen とは、戦時体制と戦後体制を貫く生産力主義・科学技術を駆動する当の作用である。ところが、その上で注意されるべきは、にもかかわらず、あるいは、まさにそうであるからこそ、ハイデガーは、Bestellen に包摂されながらもそこから区別される限りでの具体的で個別的な労働や労働過程に信を置きたがってもいるということである。これも、農民の行ないに関係する論点であり、本稿の最後に立ち返りたい。絶滅収容所に言及するもう一つの箇所を見よう。

何十万人が大量に死ぬ。かれらは死ぬのか。かれらは失われる。かれらは打ち倒される。かれらは死ぬのか。かれらは死骸製造の在庫品になる。かれらは死ぬのか。かれらは絶滅収容所で気づかれずに粛清される。そしてそのようなことはなくとも、いま中国では何百万人が飢餓のため最期をむかえる。(S. 56)

ここでも絶滅収容所と飢餓をどうして同一化・類比できるのかと問うことはできるが、そこは措き、ここで仄めかされていることは、Ge-Stell が大量死・大量殺害へと引き立てるということよりは、おそらく、人間が死すべきもの (Sterbliche) になることによって Ge-Stell 及び大量死・大量殺害を打破するかすかな見通しがあるということであろう⁸。いずれにせよ、以上の二箇所はさほど緻密に書かれてはおらず、ある種の世界観の表明と受けとめておけば足りる。

さて、戦時体制を引き継ぐ戦後体制、すなわち、Bestellen のシステムである Ge-Stell に対するハイデガーの両面的態度を確認していきたい。Ge-Stell 論にあつては、stellen 系の用語が駆使されながらも、それでは把捉できない自然力が出て来ている。そして、自然力は主として treiben 系の用語で描写されている。それを描写する stellen 系の用語が自然言語には用意されていないわけでもある。

例えば炭鉱地区で stellen された石炭はどこに stellen されるか。石炭は、瓶が机に hinstellen されるようには hinstellen されない。石炭は、地盤が石炭へ stellen されるように、それはそれで熱に stellen される。すなわち熱へ誘発される。熱は既に水蒸気を stellen することに stellen される。水蒸気の圧(Druck)は伝動装置(Getriebe)を treiben し、工場の操業(Betrieb)を維持する。この工場は、機械を stellen することへ stellen されている。この機械が道具を herstellen し、道具によって再び機械が Stand へ stellen されて維持される。(S. 28)

水力発電所についての有名な箇所にあつては、treiben 系の水圧が stellen 系の用語におさまられていくが、今度は、stellen 系の用語で把捉しにくい Strom が出て来ている。

水力発電所は Strom に stellen されている。水力発電所は Strom をその水圧へと stellen し、その水圧はタービンを回転することへと stellen し、その回転は機械を umtreiben し、それら伝動系(Getriebe)が電氣的 Strom を stellen し、その電氣的 Strom によって (durch den) 長距離送電所(センター)とその Strom 網が Strom 輸送へと stellen される。ラインの Strom、ダム、タービン、発電機、開閉装置、Strom 網——これらと他のすべては、現前するためではなく、他を stellen するべく stellen されるためにその場その場(Stelle)に止まる限りにおいてのみ存在する。(S. 28)

ここも叙述に曖昧さがあるが、その(部分的な) Ge-Stell を存在させているのは、ひとまず電氣的 Strom であると読むことができる。そこにラインの Strom を加えてもよい。そして、当たり前のことだが、水流や電流といった自然力の動力源無くしては、一連の施設は Ge-Stell の下で存在することはない。すると、どういうことになるのか。もう少しテクストを追ってみる。

ハイデガーは、こんな命題を連ねている。Bestellen を「大地に埋もれた素材と力」(S. 29)の開発=搾取と捉えることはできない。Bestellen の連鎖は「暴力」とも言えるが、それはおよそ人間の行ない(Tun)とは言えない。人間そのものが bestellen される(S. 30)。人間そのものが在庫品である(S. 37)。森の番人(Forstwart)さえも、産業によって stellen される(S. 37-38)。その上で、ハイデガーは、自然力と技術の関係、自然力と Ge-Stell の関係について論じていく。まず、退けられるべき疑念が提示される。

とはいえ、ここで疑念が出される。技術の本質が Ge-Stell に存し、他方で技術が自然の力と素材を stellen することを目指すのだとすれば、すなわち自然の力と素材を、成果に向かうものにおいて誘発されて要求されるものすべてとして誘発することを目指すのだとすれば、まさに技術の本

質からして、技術が普遍的ではないことが示される。自然の力と素材は技術に決定的限界を置くので、技術は、技術的在庫の源泉と後援としての自然に頼るままである。それゆえに、われわれは、すべての現前するものが、Ge-Stell の Bestellen のうちで立つ持続的なものの仕方で現前するなど主張することはできない。Ge-Stell は、現前するすべてのものに関わるのではない。技術は現実的なものの一つにすぎない。技術は、現実的なものすべての現実性をなすなどということからは隔たったままである。(S. 40)

この疑念は、Ge-Stell と技術の支配下に入りえない自然の力と素材が現前するとしている。Ge-Stell と技術はすべてではないとしている。ハイデガーの応答、問い返しはこうなっている。

それにしても自然とは何か。Bestellen が常に再びそこに回帰しなければならないものとして、技術的在庫の外部に現前するはずの自然とは何か。いかに自然は現前するのか、技術が自然に依存しながら自然から発電所の力と素材を取り出してくるころの自然はいかに現前するのか。技術に stellen される自然力とは何か。答えは自然科学が与える。(S. 41)

おそらく、自然力はそれとしては現前しない。現実的なものでもない。自然力は、Ge-Stell に bestellen される限りで現前する。水力も電力も原子力もそうになっている。では、四大の力、発電所を打倒した力は現前しなかったというのか。自然力は Ge-Stell そのものを破壊する力として現前しなかったというのか。まさにここで、ハイデガーは、自然科学を呼び出す。

なるほど物理学はわれわれに力の本質について何も言わない。[...] 物理学的には自然力はその Wirkung においてのみ接近可能である。というのも、力はその Wirkung においてのみ、その大きさの計算可能なものを示すからである。計算において力は対象になる。自然科学にはこの計算の対象だけが問題である。自然は、度量と数で stellen された Wirkliche として表象され、この Wirkliche がその Gewirkten のうちで対象的に現前する。この Gewirkte が現前するものとして妥当するのは、それ自体が wirkt し wirkfähig として示される限りにおいてだけである。自然の現前的なものは Wirkliche である。Wirkliche は Wirksame である。自然の現前することは、Wirksamkeit に存する。その Wirksamkeit において自然は何かを Stelle から Stelle へもたらすことができる。すなわち erfolgen させることができる。(S. 41)

自然科学では、treiben 系と Strom 系の用語で指標された自然力は、その Wirksamkeit においてだけ現前するものとして捉えられる。同じことは、Betrieb や Strom 網を、ひいては(部分的) Ge-Stell を破壊した自然力についても言われるだろう。「われわれ」は、自然力が現前するのを見るわけではない。経験することもできない。破壊力の Wirksamkeit を自然科学的に表象しているだけである。とするなら、技術と自然、Ge-Stell と自然力といった区分線・対決線は引くことはできない。おそらく。

自然が技術に対して立つのは、無規定の現前するもの自体としてではない。自然が技術一般に対して立つのは、とくに搾取＝開発される対象としてではない。技術の時代において、自然は、Ge-Stell 内部の bestellen 可能な Bestand にあらかじめ属している。(S. 41-42)

この「あらかじめ」という時間性については、元々そうなっていたということ以外ではない。Ge-Stell によるいわば本源的蓄積は、何よりも自然において「あらかじめ」起こっている。そこに、〈労働力商品化の無理〉がないように、おそらく〈自然の bestellen の無理〉もない。

自然は見かけは技術に対して立つが、既に技術の本質からして、Ge-Stell の在庫に本源的在庫としてしまわれている。[...] 現代技術の本質、Ge-Stell は、Bestellen に本質的に適合した本源的事件とともに開始したが、それは、始めに予め自然を本源的 - 在庫として確実に stellen した限りにおいてである。(S. 43)

自然は常に既に Ge-Stell の下で表象化されて現われるしかないというのである。そして、まさにそのような世界像からして、Ge-Stell に対する両価的な態度が出て来ることになる。Ge-Stell を抽象化し普遍化し世界化して迫り上げることによって、Ge-Stell は全時間的に耐えて凌がれるべきものでありながらもその極限で逆転しうるものとして、そのことに賭けておくべきものとして立ち現われるのである⁹。それが、Ge-Stell の「危険」から「転回」へというテーマである。ハイデガーは、この論脈で、Seyn (「y 存在」と訳しておく) を導入し、同時に、発生的な議論を再導入する。そこでは、Sein の「静かな力」を、もう一段彼方に(奥に、底に)送り込むために——『哲学への寄与論稿』でいわば幾何学化され〈経綸〉へと引き上げられた——Seyn が導入されていると見ることもできよう。「技術の本質は、Ge-Stell の本質形態における y 存在そのものである」と宣言してから、ピュシス論に進み、ピュシスは hervorbringen (S. 64) するものと語られ、発生論に立ち返る。そして、Ge-Stell はピュシスに由来すると宣言される。

技術の本質は Ge-Stell という名をもつ。なぜか。Ge-Stell で名指される Stellen は、存在(すること)そのものだからだ。にもかかわらず、y 存在が、その運命の始まりにおいて、明るくなったのだ。ピュシスとして、自ら上昇し産み出す Stellen することとして (Stellen を送ることとして) 明るくなったのだ。この y 存在の本質からして、ピュシスからして、Ge-Stell として wesen する y 存在は、その名を封土として受け取る。(S. 65)

Ge-Stell がすべてを覆い、その stellen が sein させることと相覆うところまで進められている。「われわれ」は発電所が存在し電力が存在し会社が存在し政府が存在すると思っている。「われわれ」もそこに存在すると思っている。この存在は現前でもある。どうしてか。Ge-Stell の下で stellen しているから、である。とするなら、発電所や政府等々はそれぞれ存

在者として何処かから立ち上がってきた、立ち現われてきた、立たされて来た、端的に言
って産み出されてきたと言ってもよさそうである。おそらく、それを守護し保護する〈農
民〉がいる。そして、ピュシスは隠れて有る。それを y 存在とするなら、いまや y 存在は
Ge-Stell として、その名を用いて *wesen* していると言ってもよさそうである。この y 存在＝
ピュシスは、おそらく力をもって指標することはできない。存在 - 歴史的な運命として堪
えて凌がれるだけである。戦時体制がドイツで発癌して朽ち果てたように、世界化する戦
後体制はいつか発癌して朽ち果てるだろう。その悪性の癌から一線を画すにしても、発癌
そのものは死すべきものの運命であるからには、発癌の贈与に堪えながらも受けとめなけ
ればならない。ドイツからも世界からも追い立てられた「滞在地」で凌がなければなら
ない。このハイデガーの両価的態度は、戦時体制の世界化として戦後体制がある限りにおい
て、簡単には非難しがたい、ありうべき態度であるとは言えよう。

三 普遍的システムはあるのか

「ブレーメン講演」における物の議論、瓶を例にとったその議論はよく知られている。
瓶は、自立的対象 (Selbststand) でもあり対象 (Gegenstand) でもあり、製作 (Herstellen) によ
って立てられたもの (Herstand) でもあるが、その物の物たる所以はそこにはないとされ
る。つまり、生産主義的でも科学技術的でもある対象化労働は物の物たる所以に効かない
こととして退けられている。そして、物の物たる所以は、大地と天空、神的なものと死す
べきものの四方界 (Geviert) のうちに位置づけられる。

瓶は物として *wesen* する。瓶は物として瓶である。では、どのように物は *wesen* するの
か。物は物化する。物化することは、集約する。物化するとは、四方界を出来させなが
ら、四方界の暫しの間を、それぞれの暫しの間へ集約する。この物へ、あの物へと。(S.
13)

この物の物化の議論は、そこで文化的な機能や背景があれこれ論じられて加えられては
いるものの——戦時期には、瓶は、戦勝を祝賀する祝杯として国家的文化行事の文脈に位
置づけられてもいた——、基本的には、発生生物学的な発想に生態学的・環境論的な発想
が加味されたものであると言えよう。では、物の物化はどのように発生するのか。「いつ、
いかにして、物は物としてやって来るのか」。

さて、原子力発電所は、物化を始めていると言えないであろうか。発電所を Ge-Stell に
よる施設の整列から脱落させたものは、まさに自然の力であった。大地の揺れ、揺れる大
地 (海) の力であった。その後、発電所は、Ge-Stell が bestellen すべき在庫から脱落しつ
つある。そして、四方界と新たな関係を取り結びつつある。端的に言って、Ge-Stell や対象
化労働の下では自立的対象や対象は在庫化されてしまうわけだが、それが廃墟化するとき、
物化するのであると言うことはできそうである。しかも、いま危険区域では、新たに物化

と世界化が始まっている。もちろん Ge-Stell は、その物化の過程に抗している。とするなら、どういうことになろうか。

原子力発電所を四方界の下での物として捉えることは、ハイデガーの物論からすぐに連想されることであるが、はたしてハイデガーは認めたであろうか。おそらく認めなかったであろう。あるいは、認めたくとも——ちょうど農民の種子育成だけには別の地位をあてがいたかったように——、認められなくなっていると言ったであろう。そして、むしろハイデガーは、現に Ge-Stell の下で在庫化されているものについて、それが同時に物化し、そこで同時に同所的に世界化が起こっていると語る方に傾いたであろう。技術の本質に存在 - 歴史的な運命を感知するという両価的な態度を表明し続けたであろう。

ところが、ハイデガーは、にもかかわらず、あるいは、まさにそうであるからこそ、周知のように、芸術作品を特権化してもいる。ところで、ここから直ちに、いまや通俗的ともなっている連想が従う。すなわち、そもそも芸術作品とは、少なくとも現代芸術作品は、Ge-Stell において製造されながらも生産物の位置を占めることはないし、かといって消費物にも最終消費物にもなりえない、ただ展示されその後廃用されるだけの廃棄物の位置を占めているのではないか。とするなら、物の物化と世界化は、ときおり、稀なる空き地で、現在の原子力発電所や少数の芸術作品としてどこからともなく発生するといった具合ではないのか。再び、しかし、そのような連想の筋は、ハイデガーの本意ではないであろう。とすると、どうなるのか。ハイデガーは、後の方で、こう書いている。「Ge-Stell の本質においては、物としての物の荒廃 (Verwahrlosung) が出来する」(S. 47) と。戦時期のハイデガーもそうであったが、この「荒廃」を嘆いているのではない。そうではなくて、物が荒廃するというそのことがチャンスであるとするのである。それは、戦時期には新たな国家形成のチャンスであった¹⁰。では、戦後期にはどうなるのか。国家形成の夢を捨てた戦後期に、その夢の行方はどうなったのか。ハイデガーは、その荒廃から芸術作品が立ち上がるとも物化と世界化が立ち上がるとも言いきらなかった。おのれが生きている間は、そんなことは期待できないからであったのだろうか。おのれは時を凌ぐだけにならざるをえないと何度も語ったことからして、何か明示的に語ることは控えなければならなかったからであろうか。それにしても、どうして瓶と芸術作品を特権化できたのか。どうして種子育成を特権化できたのか。あるいは、そう受けとられかねないことを書きたかったのか。

ハイデガーにとって、戦時体制と戦後体制は一つながりのものであった。科学技術は自然力を隠しながら仄めかし、Ge-Stell も自然力を隠しながら仄めかす。そして粗略にまとめれば、その自然はピュシスへと、さらに存在・y 存在へと迫り上げられる。そこから戦時体制と戦後体制が癌のごとく発生することは存在 - 歴史的な運命である。ところが、ハイデガーは、存在者の発生を農民の育成と芸術家の制作は特権的な仕方で再現するように見えると言いかけるが、決してそのようには言いきらない。幾多の解釈上の問題はあるにしても、ハイデガーは、Ge-Stell の只中に局所的であれ何らかの破綻や新生があるとは期待しない。それは、戦時期に賭けられたところの民族からの国家形成を放棄したその姿勢を一貫させたからであるとも思われる。そして、その一貫性は、戦時体制と戦後体制を一つながりとする見方の代償でもあり効果でもあった。

そして、ハイデガーのこの両価的態度¹¹は、その後の現代思想界を制約してきたと見る
ことができる。世界を覆い尽くす何ものか、世界の存在者をそのように存在せしめる何も
のか、抽象的で普遍的な何ものかは、産業主義化や資本の文明化作用やグローバリゼーシ
ョンなどと言いかえられ、それに対抗する局所的な発生・芸術・労働がおそるおそる言祝
がれることが繰り返されてきた。「われわれ」は依然としてハイデガーの世界像とその両価
的態度のうちで右往左往しているわけだが、私の見るところ、そこを脱する道は、システ
ムの極限の危機を転回として予期することなどではなく、そもそも抽象的・普遍的・存在
論的システムなど存在しないということを経験的にしかと認識することである。例えば、
Bestellen が人間の諸活動すべてを覆い尽くしているはずがないのだ。Ge-Stell が単数形で存
在しているはずがないのだ。科学技術が文字通りその世界像で経験を覆い尽くしているは
ずもないのだ。簡単な話だが、ハイデガーとその末裔の議論は所詮はヨーロッパ中心主義、
西洋中心主義でしかない。仮にその「アメリカ化」の動向が「惑星規模」で他の大地を覆
い尽くすとしても、それがひと色で染め上げられるはずもない。とするなら、戦時体制と
戦後体制を一つながりと見せかけているものそのものを退ける必要がある。

註

- ¹ 『「ヒューマニズム」について』からの引用については、Klostermann 版 (略号 K) の頁数を本文
当該箇所につす。
- ² オイケンについては、ミシェル・フーコー『生政治の誕生：コレージュ・ド・フランス講義 1978
—1979 年度』1979 年 1 月 31 日、2 月 7 日、2 月 14 日の講義を参照。また、藤本建夫『ドイツ自由
主義経済学の生誕 ——レブケと第三の道』(ミネルヴァ書房、2008 年)、柳澤治『戦前・戦時日本
の経済思想とナチズム』(岩波書店、2008 年)が有益である。
- ³ 『哲学への寄与論稿』(1936 - 1938 年) (GA 65), S. 177, S. 284 なども参照。
- ⁴ この観点から、シュタウディングー事件を見直すこともできる。この事件については、奥谷浩一
『ハイデガーの弁明 ——ハイデガー・ナチズム研究序説』(粹出版社、2009 年)が周到である。と
はいえ、奥谷は、ヘルマン・シュタウディングーについて「現在から見ればいささかも罪のない一
人の同僚の化学者」(227 頁)と書き、その流れの中で、1919 年のシュタウディングーの論文
(Staudinger, *La technique moderne et la guerre*, *Revue internationale de la Croix-Rouge*, 1919)の一節を 244 - 245
頁に引用している。それは、いわゆる技術の中立性論であり、この意味でもシュタウディングー
は典型的なテクノクラートであると言ってよい。ところで、技術は危険も救済ももたらしうると
のシュタウディングーの見解は、具体的には、同じ物質が爆弾にも肥料にも使用されうるとい
った例に基づいている。しかも増大する人口を支えるために肥料を増産すればするほど、爆弾の製
造能力も強化されていくといった次第になる。シュタウディングーはこの過程を停止させること
ができるとはまったく考えていない。言うところの「道徳的目覚め」に対してそんな役割を期待も
していない。別の論文(H. Staudeinger, *Rapport technique sur la guerre chimique: Annexe au rapport de
MM. Cramer et Micheli, Revue Internationale de La Croix-Rouge*, 1925)を見ると、もっと議論は具体的になっ
ている。そこでは、第一次大戦での毒ガスによる死亡率と爆弾による死亡率を比較し、毒ガスは
大きく騒がれて恐れられてきたが、実際には決して爆弾による死亡率を凌駕できないと論じてい
る。殺戮機能が劣らざるをえないことを科学的に縷々説明して、技術的合理性と戦術的合理性か
らして毒ガス兵器は無意味であるとしているのである。だから、毒ガス兵器は通常の爆弾より人
道的なのである。その上で、道徳的配慮というべきであろうが、たとえ飛行機での使用可能な改
造が行なわれたとしても、女・子どもなどの非戦闘員に対しては使用されるべきではないと付け
加えている。そして、毒ガスに対する反対論は今日では justifiable ではないと結論する。シュタウ
ディングーは、まさしく典型的なテクノクラートなのである。ハイデガー学長がそこを捉えて告
発に出たわけではないが、やはり象徴的な事件であると言えよう。ちなみに、シュタウディング

一は、1938年6月には「四か年計画と化学」という講演を行っており、少なくともとも「罪のない」とは言えない。ハイデガーと比べてどちらの「罪」が重いとも簡単ではない。また、シュタウディングガーは、告発の審理が進行中の1934年2月には、弁明のためと見るべきだが、デュッセルドルフ民族新聞に、Die Bedeutung der Chemie für deutsche Volk なる一文を寄せてもいる。

- ⁵ 本稿では詳細な検討は省略するが、学長時代から戦時期にかけて、ハイデガーが、労働概念を拡張して人間の活動一般と同一視したとする理解は間違えている。労働の下での平等を目指したのでもない。一般に、ハイデガーにあって、労働の精神性の強調は、社会政策的に労働をソーシャル・ワークへと拡張する局面はあったものの、決して精神労働と肉体労働の区分の廃棄にいたるものではない。また、労働/労働力、労働/余暇の区分を行なうものでもない。ハイデガーは、通例の諸労働観のすべてを「技術人間」に帰したのであり、ハイデガーとしては、民族からの国家形成に寄与する限りで同等の精神性を有するとして労働を肯定しただけである。この点では、『言語の本質への問いとしての論理学』(1934年夏学期)(GA 38)が重要である。
- ⁶ 『形而上学入門』(Niemeyer, 1935/1953), S. 28などを参照。
- ⁷ 「ブレーメン講演」からの引用については、全集版(GA 79)の頁数を本文該当箇所につす。
- ⁸ この引用箇所に関連して連想を一つ記しておきたい。浪江町の畜産家である吉沢正巳は、封鎖された警戒区域内の農場にとどまり、牛を餓死に追いやることも殺処分することもせず育て続けている。一応の名目的理由は、牛を死ぬまで生かすことによって被曝のデータをとれるから、ということである。つまり、この牛たちは、死すべきものとして生かされ育てられているわけである。吉沢はその牧人となっているわけである。また、その牛にしてもその営みにしても、浪江町の新たな四方界と深く繋がっていると言うこともできる。牛の大量殺害、牛の大量飢餓死とは一線を画すものとしての、牧人に見守られる牛の死。Ge-Stellによって製造され破壊され介入され続ける大地と大気その只中で、牛を死すべきものとして育成し続けている空き地。はたして、こんな連想をハイデガーは認めたであろうか。
- ⁹ この態度は、戦争に賭けたハイデガーの態度と同型である。引証できる箇所は多いが、『ヘルダーリンの讃歌「イスター」』(1942年夏学期)において「機械技術という精神の絶対的実現」に賭ける箇所(GA 53, S. 66)をあげておく。
- ¹⁰ 荒廃のテーマ系はハイデガーでは重要である。「形而上学の超克」(1936 - 1940年)(*Vorträge und Aufsätze*, Neske), S. 68などを参照。この点で、戦争直後の1945年5月8日に書かれたと目される「ロシアの捕虜収容所で年下の男と年上の男の間で行われた夕べの会話」(GA 77)は興味深いテキストである。「主観性の蜂起」と「労働への蜂起」が地球の荒廃を準備するのだが、それを準備したのは、最初はドイツであり次いで戦勝国であって、その荒廃は必ずしもネガティブなことではないとされている。それはドイツ零年から始め直すといったことではなく、主観性と労働の極みの荒廃を待ち望むといったことであり、しかもその態度をもって、ハイデガー自身の子どもの運命の示唆と併せて、戦時期の弁明となっている。このテキストを読むだけで、ハイデガーが揺らがなかったことの事情が理解できよう。
- ¹¹ 「放下」(1955年)のいう「技術的世界に対する同時的な然りと否の態度」「物への放下」(GA 16, S. 527)である。

Yoshiyuki KOIZUMI

Eine Fortsetzung durch Kriegsregime und Nachkriegsregime